序＝断片的ヴィジョン

本篇の発行作業 ――資料入手、編集、印刷――はすべて、無名の一少女の手になる。

わずかに読み手を想定しうるとすれば、新聞をふくむマスコミにふれることが決して日常～自明ではない人々、すくなくとも（二十）年以上その購読を宙吊り得る（らざるを得ない）人々、すべての資料が失われてありなおかつ自己史をふくむ人類史を対象化する言語表現がこれらのマスコミ以外にはない状況から、本篇を把握しようとする人々、自己史に関わる一切から巡礼――もしくは（Ａ３６７位相の）強制執行による押収～留置状態にありつつ、はるかな未～的視点から、大学斗争のエネルギーとその本質、人類史的根拠をとり出だそうとする人々、自からの存在的エネルギーの根拠、そのゆくえの不安～不確定さにうち震えうる存在、そして－－－。

また、例えば、松下昇についての批評集 γ～β 系作成過程の時間性の中で、自らの言語（失語）領域とその根拠を照射する契機を与えられている、と感じる存在。

大学斗争をふくむ＜ ＞～［ ］過程において 出舎（会）い、うみ出し、変革されつつある概念の＜文字＞＜化～＞ ＞化作業を行いつつある過渡にこれを刊行する。

時の楔通信発行委託の提起（一九八七、三・三０）による、表現論的革命状況。（これについては前項との関連で別の場で展開）

大学斗争――――

自己をふくむ人類史総体と現代世界そして＜日本＞への根源的懐疑、否定～の不可避性。

↑それを生きるべき（仮装すべき）根拠と原理の発見、創出を 存在運動論～α、β、γ、…μ～全幻想領域を横断する存在的組織論として（において）必要とする世界史的過程。人類史的な転換波動の総体。

なによりも一瞬ごとの生き生きとした永続性の感受、発見。

（更にｎ項目 記すことは可能）

大学斗争のエネルギー、生涯を超える時間性に出会ってしまっている情況的＝人類史的熱気の質――その（新）次元的反乱（氾濫）の本質を その＜時＞を生き抜いた人々のむこうへどのように継承～伝達、持続、深化しうるか、その方法論を含む記述～表現論。

尚、本篇は中京地域（大和朝廷による支配～隷属化が早期に行われ、朝廷を支える生産的背景として保守的風土の形成。）に於ける報道＝名古屋本社版および大阪本社版を軸として構成している。

ひとつの文明のかたち～症状がくっきりと浮かび上がってくる。周辺記事は、多くはあえて原資料入手過程の諸条件のままに、そのものとして編集している。

一九八八年九月～十月

仮装被告（団）

連絡先の一つ：
名古屋市昭和区山里町１８
ロゴスセンターおよび
大学会館地下 《宣言》室 気付
＜ ＞～［ ］（斗争）委員会

南山大学